

「制度」への疑義

——野草社と『80年代』における中尾ハジメ、アイリーン・スミスの仕事を中心に

一、問題設定

本稿は、野草社が刊行した雑誌『80年代』における中尾ハジメの仕事を中心に、福島第一原子力発電所の「事故」を経た現代において、『80年代』の再評価を試みたものである。

これまでに野草社や『80年代』は、絳秀美の「総じて、ニューエイジ的、コミュニケーション主義的、エコロジー主義的な色彩の濃い、しかも、生活の場で実践的な運動にコミットしようとする者のための雑誌」、「理論誌ではなく運動誌・情報誌の側面が強い」^①という、同時代に隆盛を極めたニューエイジ文化のなかに、『80年代』の仕事 positioning するものや、野草社の刊行物が、実社会や社会運動のなかで実践的に用いられていたことを指摘する安藤丈将の指摘^②などによって、同時代の文化流行の影響を踏まえながら、同時代の社会運動が実践的に用いることのできる刊行物を出版する活動を行って

いたとして評価されてきた。

もちろん、反核・反原発社会を変革しようと試みる運動を行っていた同時代の人びとに、野草社の刊行物や『80年代』が影響を及ぼしていた意義は、安藤が指摘するとおりである。しかし、福島第一原発「事故」以後に『80年代』を読みなおすとき、絳が指摘するように同時代の流行に乗っただけのようにみえる記事が散見されることも事実である。ただそのような批判は、すでに紙面上でも展開されていた。

『80年代』は、企業を中心とした社会のあり方の限界が、食料の枯渇や水や大気の汚染、原発事故などのかたちで現前化すること、またその事実を隠蔽するために、強権的な管理社会がつくられることを危惧し、それらへの抵抗を「家庭・地域・職場の生活を具体的につくりかえていく」ことのできようとした雑誌である^③。しかし、そのような目的を掲げながらも、津村喬が「何人かの常連執筆者

加島 正浩

が一種の生活評論を寄せるということに、結果としてはなつてしまつてゐる」。「現実にはみんなが連合を欲していない時に、雑誌がそれに代る役割をはたすことは不可能で、やろうとすればお題目になつてしまふ」⁽⁴⁾と記すように、雑誌の理想と読者の要望がかみ合つておらず、雑誌の記事が「お題目」のようにもみえる現状があつたことが指摘されている。読者の側からも、「あくまで自分の生きる場から今ある社会と違つた未来を考えていこうという貴誌のポリシーには、全面的に賛同いたしますが、その「生活」がもうひとつ見えてこないといういらだちも常にあります」⁽⁵⁾、「僕は、生活（暮らし）から政治や世界をとらえるというのが『80年代』の良さだと思つています。（中略）しかしながら、この所生活がみえない特集が続いている。19号にしても個々の文としては僕の生活にも関わつてゐるはずなのに、まつたくこちらへ入つてこない。書き手の生き方というか生活がちつとも見えてこないからかもしれない」⁽⁶⁾など、個々の生活から社会を変えていこうとする雑誌の趣旨には共感するものの、肝心の「生活」が雑誌記事からみえてこないという投稿が散見される。さらに、踏み込んだ批判として「文明↓×、自然↓○みたいで、とても嫌です。（中略）あなた方は本当の百姓を知つていますか？ 不作のときのせつはつまつた気持ちかわかりますか？ あなた方にとつて自然つて何ですか？ 何が文明ですか？ ぼくは、あなた方に限りないギモンをぶつきたいと思う。そしてあなた方の生き方についても……」という読者投稿や⁽⁷⁾、『80年代』の読者なんかで農業やろうというもんが口にするのは、判で押したように有機農法であり、無農薬であり、自然農法という言葉であるわけ。だけど、そんなのはただのファッションだ（中略）ファッションでなく、

生活になればいいのよ。（中略）結局ファッションで飛びついたやつは、そのファッションに飽きたらあつさり脱ぎ捨てるんだ」と述べる掲載記事もあり⁽⁸⁾、『80年代』が主張する生活改良は、都市生活者目線の、現実の生活から乖離した「ファッション」であるという批判も、刊行時から存在した。森岡正博は、概略すれば「近代の二元論を克服して、自然と一体になればよい」、「みんなが生きてつながらあつていければよい」というスローガンに落ち着く傾向にある八〇年代に流行したディーブ・エコロジーや生命主義の問題として、現代社会のシステムのなかに「商品」として巧妙に取り込まれてしまふ危険を指摘しているが⁽⁹⁾、同時代の流行に呼応するように、都市生活者が「ファッション」のように生活変革を語る『80年代』の記事が、森岡の指摘のように「商品」化していた側面は否めず、その点を取り上げて、再評価することは難しいように思われる。

そこで生活実践記事ではなく、宗教やニューエイジ的な要素があるわけでもないために、先行研究では着眼されてこなかつた中尾ハジメとアイリーン・スミスの仕事に注目する。『80年代』の創刊号から四六号まで、スリーマイル島の聞き取り調査の記事は——執筆者名は中尾の名のみであったり、連名であったり、スミスのみの名であったり変化があるが⁽¹⁰⁾——掲載されていたが、反原発の文脈で野草社に言及する桂秀実も、中尾に対しては『80年代』にも、中尾ハジメのようなアメリカ文化に精通する者が編集委員でいたが、それは上手く使いこなされなかつた⁽¹¹⁾と『宝島』との比較で述べる以上の言及を行つていない。

本稿では、次節にて野草社と『80年代』を概説したのちに、中尾ハジメとアイリーン・スミスのスリーマイル島での聞き取り調査

の論考を分析する。まず中尾ハジメが「科学」に対する疑心を持つていたことを指摘する。そのうえで、原発「事故」以後の住民の経験を客観的でない、厳密さが無いという理由で退ける。「科学」の言葉への抵抗のあり方を、重なる住民の体験を聞き取り調査によって集め、その体験を「科学」の言葉に近づけて説明しようとする試みから分析する。そして最終的に、原発「事故」以後の体験は完結することがないものであることを述べたうえで、「事故」以後を生き続けなければならないスリーマイル島の住民への聞き取り調査が、同時代に隆盛を極めた広瀬隆の「終末論」的な反原発言説と距離があつたことを指摘し、中尾とスミスの仕事の意義を明らかにしたい。

二、野草社および『80年代』の概説

——ディープ・エコロジーとの親和性

野草社は、一九七八年にヤマギシ会を脱会した石垣雅設が設立した出版社であり、『80年代』は、一九八〇年に新泉社を発売元に刊行された雑誌である。『80年代』は、一九九〇年二月に刊行した四七号で終刊し、後継誌の『自然生活』第一集が一九九〇年七月に刊行される。『自然生活』刊行当初は年四回刊行の季刊誌として一〇年続ける予定であったが、野草社が奈良県に拠点を移して以降、野草社に深く関わっていた矢追日聖の追悼号となつた一九九七年一月刊行の第一集で事実上の終刊を迎える。

野草社設立当初から、『80年代』の二四号が刊行されるまで（一九八三年一月）は、東京都文京区に拠点があつたが、二五号から

四四号（一九八四年三月〜一九八八年一月）まで、大倭教の大本宮がある奈良県大倭紫陽花邑に出版社を移転。その後も、『80年代』四五号から『自然生活』三集刊行（一九八九年六月〜一九九二年一月）まで青森県弘前市河原町、『自然生活』四集から八集（一九九三年一月〜一九九四年七月）まで京都府綾部市、『自然生活』九集から一一集（一九九五年七月〜一九九七年一月）まで静岡県袋井市広岡と、各地を転々としながら出版活動をつづけている。

『80年代』の一六号までは、編集委員体制が採られており、野草社の石垣雅設をはじめ、島田裕巳、津村喬⁽¹²⁾、中尾ハジメ、新島淳良⁽¹³⁾、野本三吉⁽¹⁴⁾、保坂展人、真木悠介、山本哲士などが編集委員として参加している。常連寄稿者としては、山尾三省⁽¹⁵⁾、正木高志⁽¹⁶⁾、阿木幸男⁽¹⁷⁾、ナナオサカキ⁽¹⁸⁾（二二号から）、矢追日聖⁽¹⁹⁾（二五号から）、宮田雪⁽²⁰⁾（四〇号から）、川口由一⁽²¹⁾（四〇号から）などがある。

一七号以降から編集委員体制が廃止されるなど、『80年代』は執筆者も内容も徐々に変化をみせながら、四七号に至る。二一号で保坂展人との関わりがなくなり、二五号で野草社が奈良県大倭紫陽花邑に移り、津村喬の関わりも希薄になる前後から内容が変化しはじめる。二五号から、大倭教教祖矢追日聖の寄稿やインタビュー記事が載るようになり、アメリカ・インディアンのホピ族を中心としたネイティブ・アメリカンのインタビューや、それに関する寄稿記事が掲載されるようになる。

これまでも一八号などに寄稿はしていたが、ホピ族の記録映画を製作した宮田雪が四〇号頃から常連の執筆者となつて以降、その傾向は強まる⁽²²⁾。また四〇号から、川口由一が奈良での自然農の

実践報告の連載を開始してから、川口を中心とした合宿や「野草塾」と呼ばれる宿泊セミナーの報告記事が目立つようになり、『自然生活』では大倭教の矢追日聖を中心とした宗教に関する論考と、「野草塾」の参加記が紙面の中心を占めるようになる。

読者は、一〇代後半から二〇代までの若者が中心であった⁽²³⁾。しかし、二一号で保坂展人が『80年代』に寄稿するのをやめ、『学校開放新聞』を立ち上げて以降、一〇代の読者投稿が減り、二〇代・三〇代が読者の中心となる。刊行が進むにつれ五〇代・六〇代の読者も増加する傾向にある。

記事内容としては、「ディーブ・エコロジー」との親和性が高いことを指摘しておく必要がある。「ディーブ・エコロジー」とは、一九七三年にノルウエーの哲学者アルネ・ネスが提唱した、個人の生き方や価値観を見直す実践的なエコロジーの概念である。たとえば、常連寄稿者の正木高志は、以下のような記事を寄稿している。

資本主義体制への隷属を離れて、自給による自立を目指す者達が力を合わせれば、共同体ができる。否、共同体によってはじめて独立は可能になる。(中略) ウッドストックやベトナム反戦、世界中に吹き荒れた学園闘争などに見られた六〇年代の革命的エネルギーは、七〇年代には二つの方向に向かっていた。ひとつはインドへのスピリチュアルな旅に見られたような精神的探求であり、他方は、都市を離れて大地や海に帰り、自給を目指した物質的探求である。この二つの探求はどちらか一方が欠けても完成しない。そのようにして七〇年代は不完全だった。八〇年代にはこの二つの面での探求がひとつの革命と

して生きられなくてはならない。⁽²⁴⁾

島蘭進は「ディーブ・エコロジー」を、「環境運動に靈性的な次元を導入しようとするもの」、「人間の真の自己実現は、自らを森や川、砂漠、山々とも連帯を感じる『生態系を中心とする同一化』によってこそ可能だとする」ニューエイジ運動の周辺にある思想であると端的にまとめ⁽²⁵⁾、井上有一は、「現代の環境問題はすでに技術的対応を超えたもの」との認識を有し、技術面の改良をもつてのみ環境問題に対処しようとする表面的な対応ではなく、「わたしたち自身のさらに深い部分、わたしたちの基本的なものの見方や考え方、価値観(中略)そしてそれに基づく社会の諸問題」を問う姿勢が「ディーブ・エコロジー」を支えていると説明しているが⁽²⁶⁾、都市を離れて大地や海に帰るだけでは不十分で、スピリチュアルな精神的な探求も同時に必要だとする正木の論は、「ディーブ・エコロジー」の影響を強く受けたものといえるだろう。また、鬼頭秀一は、ディーブ・エコロジーを、「カウンター・カルチャーの時代のアメリカ西海岸で、当時流行した思想と相互影響を及ぼしながら多様に展開していった」ものとしたうえで、「自然との一体感やアニミズム的な自然観をもともと持っているようなネイティヴ・アメリカ人などの先住民族の思想のディーブ・エコロジーの視点からの見なおしも行われており、逆にそれからの影響も強くなってきている」と説明しているが⁽²⁷⁾、この点においても『80年代』は、アメリカ・インディアンへのホピ族の文化へ傾倒していた宮田雪を常連の執筆者に迎えるなど、次第にネイティブ・アメリカンの文化への注目を強めていく。特に後続誌の『自然生活』においては、カナダの先住民

族が住むサスカチワン州から原子力発電のためのウラン開発を日本の動力炉・核燃料開発事業団が行おうとしていることや、広島と長崎に投下された原爆が、「アメリカやカナダの先住民の土地から発掘されたウランでつくられ」⁽²⁹⁾ たちなどを踏まえた特集が組まれており、ディープ・エコロジーやアメリカ・インディアンの文化の影響を受けながら、日本における原子力政策の問題を国際的な課題にひらく姿勢がみられる。

つまり『80年代』や『自然生活』は、自身の価値観を問い直しながら、自身の生活の変革を試みる、同時代に流行したディープ・エコロジーの考え方を基盤に置く雑誌であるといえる。当然、反原発記事においても、例外ではない。たとえば緒方順子は、以下のように述べる。

では、地球の一員として、どう反対していくか。どう反原発の姿勢を表現していくか。デモをするのか、署名をするのか。いえ、やはり、日々の生活を、反原発のスタイルに変えていくことと思う。毎日の生活を、しっかりと大地に足をつけ、環境とできるだけ共存できる方向へ、暮らしぶりを変えていくことだと思う。これが、私の反原発のスタイルであり、戦い方であると思う。地味ではあるが、原発に頼らない生活を、自分で創り出していくことだと思う。⁽³⁰⁾

自身を「地球の一員」であるとしたうえで、日々の生活を原発に頼る必要のないものに変えていくのが戦い方であるとする緒方の姿勢は、基本的な生活の見方や仕方を変えることで、原子力政策

という大きな仕組みを変えていこうとする点で、ディープ・エコロジーとの親和性が高い。他にも阿部功一なども「原発を必要としている人たちがいて、それを生み出す社会の必然がある。それはこの大量生産、大量消費社会であり、反原発の運動は、この一人一人の生活を問い直すことなしには意味がないと思う」⁽³¹⁾と述べており、表面的に原発に反対するのみでは不十分で、原発を成立させてしまっている大量消費社会のあり方を、一人一人の生活を問い直すことで変革することを志向する点で、緒方や『80年代』の反原発の運動の方向性と軌を一にするといえる。ただし、「有機農業運動が原発の問題に素直に乗ってきたということは、今の、そして将来の社会と実はつながりがあるわけです」⁽³²⁾と述べ、有機農業を生活の変革の中心に置く樋田劭の記事が『80年代』の紙面にならぶとき、都市生活者が、今ある現実とは異なる現実の夢想を可能にする「商品」として記事を受容する結果に終わりがかねないことは、前節で述べたとおりである。

三、「科学」の制度への疑心——中尾ハジメ『スリーマイル島』

では、ディープ・エコロジーとも生活実践とも距離があつた中尾ハジメ⁽³³⁾の仕事にはどのような意義があつたのだろうか。野草社の中尾の仕事は、『80年代』に掲載された一〇本の記事と⁽³⁴⁾、一九八一年九月に野草社から刊行された『スリーマイル島』が主たるものである。『スリーマイル島』の初出は、季刊『クライシス』（一九八〇年夏）、月間『総評』（一九八〇年一、二、三月号）、『技術と人間』（一九八〇年一月号）、『思想の科学』（一九八〇年一月号）と多

岐におよんでいるが、『80年代』に掲載された記事が多く、『80年代』一九八〇年一、二、三、六、一九八一年七号)、自身が編集委員であったこともあるが、『80年代』は中尾に書く場所を与えていたということができるだろう。

スリーマイル島での原子力発電「事故」以後も、現地に住み続ける住民への聞き取り調査を通じて中尾は、まず科学の言葉を問題視する。

重要なのは放射能が何キュリーか、何マイクロ・キュリーか、被曝量が何レントゲンか、何ラドか、何レムか、何ミリレムかであると。その頭の質がどうであろうと電力会社も、原子力規制委員会NRCも、その言語でしゃべり、一夜づけの新聞記者たち、そして私たちも、その言語に右へならえをする。わがわが、わかるまいがだ。／報道陣にとつて、この手の事故のおそろしきは、そして取材の段どりは、圧倒的に言葉と言葉のやりとりにもつき、感覚の証拠は極限にまで小さい役割しか果たさない。(『スリーマイル島』、二〇頁)

中尾はまず、原発「事故」以後に力を持つのは、科学の言葉であり、「事故」以後に何が起こっているのかもわからないままに、その言葉のみが流通し、「事故」以後の光景は語られると指摘する。そのため、以下のような住民の訴えも、科学の言葉によつて退けられる。

葉が落ちた？ 枝が枯れた？ それほど放射線をあびているわ

けがない。それが放射能のせいだというのなら、もう人間がばたばた死んでいるはずですよ(またしてもこれだ。放射線だとは住民はいっていない、ただ異常な落葉が目につくといっているのだ)。なん百レムもの致死量をこえる放射線をあびせなければ葉が落ちたり枝が枯れたりなどということはおこらないという科学的常識をもつてすれば、このあたりの風景が住民の目には普通でないとしても、いふべきことはほとんどない。(『スリーマイル島』、一一三―一二四頁)

ただ「葉が落ちた」、「枝が枯れた」という状況を述べているだけにもかかわらず、科学はそれをすぐに「放射線」と結びつけ、現実に起こっている光景を否定する。つまり科学者は、現実の光景を確認して、「事故」以後の様子を把握するのではなく、「事故」以前に確立した科学の制度を基に、「科学的」な数値と言葉によつて組み立てられた科学者の「常識」のみで「事故」以後の現実を把握し、住民の訴えをあり得ないこととして、片づけるのである。

原発「事故」を、「事故」以前に確立した科学的な制度で把握しようとする以上、「事故」によつて「科学」が変化するはずなのことがわかる。中尾はそれを以下のように整理する。

これ(引用者注——事故以後、死んでいる動物が増えたような気がするという聞き取り結果)は、いわゆる「ハードな情報」では、まったくくない。専門的訓練をうけたものは、頭から、それではだめだ、話にならないというに違いない。／そして、体制の維持、安泰のための特效薬、安易な二分法が動揺する人心を支

配すべく登場するのは、こういう場面なのだ。「事実」と「心理的なこと」という二分法である。そして、この話などは、住民がいかに心配しているかという証拠である、というふうにか取りあげられないのだ。事故による最大の損害は精神的なものであった、などといわれるとき私たちは警戒するべきだ。自分の気もちが認められたなどと錯覚してはならない。損害をおよぼした当の体制がなんの反省もなく以前のままの口調でしゃべっている言葉なのだ。(『スリーマイル島』、四三頁)

「科学」は、「事故」以前に確立した自らの制度を保持するために、「科学」の制度が認定できるもののみを「事実」とし、そこから逸脱する「事故」以後に起こっている事実は、住民が「事故」の影響を心配するがゆえの「心理的なこと」として片づける。「科学」が「事故」以前の制度を保ち続けようとする限り、決して現地に暮らし続ける住民の体験や計測を「事実」として認定することはないのである。

では、どのように考えればよいのだろうか。中尾は、チェルノブイリ原発「事故」のあと、『80年代』に以下のような記事を寄せている。

事故が起これば今度はモデルに当てはめてね。いろいろ計画をして、何年間でこれだけの被害だということ言うんです。／＼だけどそれは、現実には起る被害とくいと違つて当たり前なんだよね。(中略)とにかく僕は核科学の専門家ではないし、核物理学の専門家でもないわけ。でも、それは非常に重要だと

思うんです。その立場がものすごく重要だと思うのはどういふことかと言うとね、専門家でない人間が持っている常識が、今ほど必要な時つてないと思うの。⁽³⁵⁾

科学は「事故」以前に確立した「モデル」を「常識」として、「事故」以後の現実を把握していくため、専門家でない人間が持っている常識——たとえば、「事故」以前と比べ、死んでいる動物が増えているのは、「事故」の影響があるのではないかといった考え——を、「事故」以前の科学の「常識」をもって否定していくわけである。

そのときに中尾は、科学の「常識」に否定される専門家でない人間が持っている常識が重要だというのである。確かに、科学の専門家でない人間が、科学の言葉を持つて原発や「事故」の危険を訴えた際に、ある科学者の「口まね」であるとして、一笑に付される光景は、日本でもたびたびみられてきたことである。⁽³⁶⁾ 次節では、中尾とアイリオン・スミス⁽³⁷⁾との共同の仕事から、専門家でない人間が持っている常識の重要性を明らかにしながら、「科学」の制度への抵抗のあり方を考察したい。

四、「科学」の言葉に現実を重ねつつける

前節で述べたとおり、『科学』は人びとの観察は厳密さがなく、制御されていない、とけちをつけ、「信頼できないとまでいう」が、中尾とスミスは「科学」を捨て去ることもできないと述べる。

科学の現代にそだつて、その思考の様式をすてるわけにはいか

ない私たちは、いわば神秘的な怪癖ばなしへと退行するわけにはいかない。だから、たとえミリレムやらキュリーやらの言語がとらえることが、出来事のごく一部の手がかりにしかないとしても、その言語と人びとの体験を切りはなし、遠ざけるのではなく、多少なりとも近づけようとすることをやめるわけにもいかない。⁽³⁸⁾

「科学」がやってきたことは、「科学」の「常識」にそぐわない現実を「ありえないこと」として切り捨てることであったが、「科学」を見限ることもできないという認識をふたりは示している。なぜなら「科学」の言葉と「常識」が、——「わかるが、わかるまいが」——原発「事故」の影響を見定める唯一の「権威」であるため、「科学」から距離を取ってしまうと、永久に「科学」で捉えられない現実が、置き去りのままにされるからである。だからこそ、「科学」の言葉が捉えられることが、「事故」以後のごく一部の現実には過ぎないとしても、人びとの体験を「科学」の言葉で説明できるように努めなければならないのである。そのためには、どうすればよいのか。スミスが、以下のように記していることが、手掛かりになるだろう。

ベティーと会ったのは事故四年後だが、もしそれより二年とか三年前だったら彼女の話も違っていたと思う。事故の年の話がある意味でもっと新鮮なのと同時に、自分の経験に対する理解はこの四年後の時のようではなかっただろう。つまり、ベティーがここまでくるのに四年かかったのだ。そして聞いた私も、理

解に時間がかかっている。／これはプロセスなので、決してここで完結されたことではなく、これからも蓄積はつづき、理解も深まることあるだろう。⁽³⁹⁾

「事故」が何であったのかを理解するのは「プロセス」であるというスミスの認識が重要である。経年とともに「事故」の経験への理解が深まるのはわかりやすい。加えて原発「事故」は、時間をかけ、自分や周囲の風景に影響を与えることもあるため、「事故」以後はいつ終結するかわからない、完結のみにないプロセスであるといえる。そのため、「事故」以後は、経年とともに蓄積され、「事故」への理解は深まっていく。つまり、聞き取りで聞くことのできる経験談は、常に途中経過の報告なのであり、確定したものではないのである。スミスに加え、中尾も以下のように述べている。

今回も八月にスリーマイル島に行つて聞き書きをする予定ですけど、本当は僕はそういう科学がこれからの科学になると信じて疑わないんです。今、各方面にかなり批判されている十九世紀ヨーロッパ物理学の延長上にある科学は、いろんな意味で人間の大切な知識というものを次々と破壊してきちゃったと思うのね。するともうしようがないから、ほんとにしようがないからなんですよ、何とかして模索しなきゃいけないと思うんだ、別なあり方をね。⁽⁴⁰⁾

既存の「科学」は、原発「事故」以後の現実を直接に捉えるものではなく、原発「事故」以前に組み立てられた制度に「事故」

以後の風景にあてはめ、制度に合致しない現実には「心理的なもの」として切り捨ててきた。聞き書きというのは、既存の「科学」によって、切り捨てられてきた現実を掬い取る営みではあるが、それが「これからの科学になる」とはどういうことか。高木仁三郎は、『80年代』に寄稿した記事において、以下のように述べている。

（引用者注——核開発や原子力開発の）秘密の厚い壁が破れかけてきたいちばんの原因は、不幸な現実ですが、世界中の何十万（百万を超えるかもしれません）という被ばく者の身体に、ガンやさまざまな異常がはつきりと認められるようになったということでしょう。沈黙させられていた人びとが、その身体や命によって証言を始めたといつてよいのかもしれませんが。⁽⁴⁾

一般には閉ざされてきた核開発や、原子力開発の危険性があらわになつてきたのは、不幸な現実ではあるが、被ばく者の身体にガンをはじめとする異常が認められるようになったからである。高木は述べる。つまり「科学」が、被ばくの問題を「心理的なもの」として片づけることができなくなつたということである。加えて、高木は以下のようにも述べている。

科学者がなかなかデータにしないけれども民衆が知っている事実として、核は非常に危険であるということにはわかつていた。民衆の知恵としてはわかつていたんです。／今、ようやく広島・長崎のデータを通じて、私達科学の方もやっとそれに気がついてきているんですね。（中略）私達がやっている科学なんていう

のは、民衆の体験を追つただけです。どう追つかけるかというところに、私達の勝負の仕方というのはありますけれども、あくまでも科学は先行するわけではないのです。⁽⁴⁾

高木は、「科学」が民衆の知恵に先行し、核の危険性を把握しているわけではないと述べる。あくまでも、被ばくした民衆の体験を追いかけて科学は、核の危険性を認識することができるというのである。これが中尾の述べる「十九世紀ヨーロッパ物理学の延長上にある科学」ではない。「別のあり方」ということであろう。「事故」以前に確立した制度にあてはまる現実だけを「事実」として取り出し、「科学」の制度を揺らがせないのではなく、現実を直視し、追いかけて、それを適切に理解しようと努め、科学のあり方自体を変えていくこと。それが被ばく以後に、求められる態度であるはずなのである。だからこそ、「専門家でない人間が持っている常識」が重要なのである。専門家でない人間の常識を曲げる必要はなく、変わるべきなのは、「科学」の制度なのである。現行の「科学」を変えていくためにも、「科学」の専門家ではない人間の常識を曲げてはならず、保持しつづけ、「権威」と体制を維持しようとする「科学」に、専門家でない人間の常識を認めさせるよう迫らなければならぬのである。中尾やスミスが、人びとの体験を「科学」の言葉へと近づけようとした試みは、「科学」に人びとの体験を「認めさせ」、「科学」の制度を揺らがせようとするものであったといえるだろう。

五、「終末論」から遠く離れて——「事故」以後は終わらない

最後に、中尾とスミスの仕事の意義を同時代の他の言説と比較することで考察してみたい。桂秀実は、『ノストラダムスの大予言』で五島勉が、「いまのような強欲や環境破壊や戦争準備をつづけるかぎり、滅亡は必ず近いうちによってくる」と述べるような終末論のリアリティが大衆にあつたことを指摘したうえで⁽⁴³⁾、以下のように述べている。

野草社の原発本で何よりも注目すべきは、「80年代別冊1」として刊行された、「緑の会」編集による『原子力発電とはなにか……そのわかりやすい説明』（一九八一年）であろう。同書の奥付を見るに、「編集『緑の会』（編集責任者・広瀬隆）」とある。／これは、同書の二カ月後にJICC出版局（現・宝島社）から刊行された、終末を扇動するフリッパントな話題本『東京に原発を！』と、同じ編著者によることが明らかである。内容的にも、さほど変わらないものだ。後者は、「広瀬隆著 企画・緑の会」とあり、同書のなかでは野草社本についても言及がある。（中略）（ここで言いたいことは、広瀬隆が、ほぼ同時に似たような内容の本を出したということではない。後年、「宝島文化」と呼ばれたものの有力な一翼を担った別冊宝島シリーズと、野草社というマイナーな出版社との、気風の相似性なのである。⁽⁴⁴⁾

八〇年代に話題を呼んだ反原発本として有名な広瀬隆の『東京

に原発を！』と、野草社で刊行された『原子力発電とはなにか……そのわかりやすい説明』が、ともに終末を煽る気風で共通していることを桂は指摘している。ここで重要なのは、八〇年代において反原発を唱える言説が「終末」を煽っていたという点である。類似の指摘は、安藤丈将も行っている。

アクティヴィストたちは、甘蔗だけでなく、広瀬隆、藤田祐幸などの脱原発知識人の著作や講演などを通じて原発の危機を知り、絶望感に苛まれた末に運動に参加していった。このような不安の喚起は、原発から離れて暮らす都市住民に対して原発問題の当事者であるという意識を抱かせた。第1章で触れたように、『朝日新聞』の報道によれば、高松行動では、参加者が「まだまだセックスしたいのに！」というプラカードを掲げて参加したという（『朝日新聞』一九八八年二月一八日四面）。このメッセージから、都市住民が「セックス」という自らの欲求の観点から運動に関わっていることがわかる。それ以前は、原発問題の当事者は、あくまで原発現地の住民であり、都市住民は、支援者に過ぎなかった。破局の恐怖を呼び起こすフレームは、彼女たちに当事者意識を持つ回路を提供した。⁽⁴⁵⁾

桂が述べるように、反原発ニューウェーブの火付け役ともなった広瀬隆には「終末論」的な語り方がみられ、そのような語り方は、安藤が指摘するように、原発「事故」の危険性を喧伝し、不安を喚起させることで、都市部の住民に原発問題の当事者である意識

を抱かせた。しかし、それは「まだまだセックスしたいのに！」というプラカードにみられるように、原発「事故」が起きることで、生活が破壊される（滅亡する）という「終末論」的な煽り以上のものではなく、そこでは「事故」以後は完結するものではなく、延々と継続するものであるという観点が欠落している。中尾とスミスが示したように、原発「事故」以後は完結することのないプロセスのなかにあるのであり、「事故」以後は、「事故」の影響を受け、変化しつづける生活を送らなければならないという（滅亡し、すべてが「終わる」よりもよほど厳しいかもしれない）現実を生きなければならぬ。「事故」ですべては終わらず、「事故」以上に長い「事故」以後を、現実には生きなければならぬのである。中尾ハジメとアイリーン・スミスのスリーマイル島での聞き取り調査は、同時代の「終末論」的な反原発論と距離を取り、先駆的にその事実を示した点でも評価すべきなのだ。

六、おわりに——福島第一原発「事故」以後の中尾ハジメの仕事

本稿では、野草社と『80年代』が同時代に流行していたデーブ・エコロジーと親和性が高いことを指摘したのちに、それとは距離があった中尾ハジメとアイリーン・スミスのスリーマイル島での聞き取り調査の意義を明らかにした。原発「事故」以後の「科学」のあり方は、「事故」以前に確立した「科学」の制度と合致する部分のみを「事実」として取り上げ、それ以外を切り捨てるものであった。そのような「科学」の制度に抵抗するために、中尾とスミスはスリーマイル島で「事故」以後の体験を集め、それを科学で説

明する試みを通じて、現行の制度化された「科学」とは、別の科学のあり方を模索しようとしていた。またその試みは、原発「事故」以後を、新たな「事故」の影響が生じつづける完結しないものとして捉える見方を前提としており、同時代に隆盛を極めた広瀬隆のような「事故」があれば、生活が終わってしまおうと捉える「終末論」的な反原発言説とは距離を有するものと指摘した。結は、広瀬隆的な「終末論」に基づく反原発言説を野草社の特徴としていたが、中尾ハジメとアイリーン・スミスのような同時代の流行とは距離のある仕事の掲載もあり、雑誌『80年代』の反原発言説が一枚岩であったわけではなく、多様な幅があったことは指摘しておきたい。

最後に、福島第一原発「事故」以後の中尾ハジメの仕事について簡単に言及して稿を閉じたい。福島第一原発「事故」以後も、「科学」が「事故」以前に確立した制度を基に、「事故」以後を捉えていることを、放射性物質の大气中濃度や被ばく線量などを予測するSPEDIの情報が—当時の政権がSPEDIから得た情報を公表しなかったという問題以前に—そもそも「事故」直後の避難には役立たないことの説明などを通じて、丁寧に示しているが⁽⁴⁶⁾、加えて重要なのは、「今の法律と制度のなかには、原発をやめるための法的組織は存在しない。裁判所がいろんな判決を出すことはできる。でも法律を越えることはできない」⁽⁴⁷⁾と、「科学」のみならず法制度にも言及を行っていることである。

原発の運転停止あるいは再稼働の差し止め仮処分を求める裁判のほうでは、国会事故調などの勧告を受けて新たにできた

原子力規制委員会の行う安全審査を、行政から、そして立法府である国会からも独立して、裁判所が評価することができるか否か、それが正面から問われることになった。再稼働容認の判決をみると、その理屈は、ひと口でいえば、原子力規制委員会の安全審査に著しく不合理な点があるとは言えず、それゆえ差し止めをする必要がないというものだ。司法は原子力にかかわる行政の裁量権に口出しをしないという、福島事故以前の姿勢がそのまま続いていると言っている。⁽⁴⁸⁾

もちろん、個々の裁判所の判断で判決を出すことは可能であり、大飯原発三・四号機の運転差し止めを認めた二〇一四年五月二一日の福井地裁の判決など、行政法規のあり方に追隨して判決を定めたかった事例もあるが、福井地裁の判決も、後に名古屋高裁金沢支部が、福井地裁の判決を取り消すなど、全体としては原子力行政に口出しをしないという福島第一原発「事故」以前の姿勢が、司法の場でも取られていることを、中尾は指摘している。加えて中尾は、福島第一原発「事故」が起こった際に、原子力災害特別措置法で定められている「一〇条通報」・「一五条通報」という「業界の間」だけが理解する暗号のような言葉⁽⁴⁹⁾が飛び交ったことにも触れており、「科学」の言葉が専門家以外の人びとには理解しがたいものであるのと同様に、法制度において使用される言葉も、専門家以外が理解できない用語であることを述べている。改めて述べるまでもなく、「科学」と同様の態度によって、法制度が確立していることが、ここからわかる。「科学」が「事故」以前の制度を固持し、民衆の体験を切り捨てるのと同様、法制度も「事故」以

前の制度を変えることなく、民衆の訴えを退ける。中尾ハジメの事は、「事故」以後に民衆を顧みることなく、原子力発電を維持させつづける「制度」を問題視することにあるといえるだろう。中尾ハジメは、原発に反対する人文社会科学系の知識人として取り上げられることのほとんどない人物であるが⁽⁵⁰⁾、原子力発電を可としつづける「制度」を問題視する重要な仕事をなしている知識人として、認識しなおす必要があるはずなのだ。

注

- 1 桂秀実『原発の思想史——冷戦からフクシマへ』筑摩書房、二〇一二年二月、二二九頁。
- 2 安藤丈将は、『脱原発の運動史——チエルノブイリ、福島、そしてこれから』（岩波書店、二〇一九年四月）において、当時愛知県豊橋市で旅行者の宿泊所を営営しており、一九八九年の参院選を前に、荒井潤とともに「原発いらない人びと」という反原発政党を立ち上げる小木曾茂子が、「80年代」編集部編の『もうひとつの日本地図』野草社、一九八五年）を読んだことで、宿泊所を自然食レストランに変えたこと（一一五頁）や、一九九一年九月一〇日から六ヶ所村で行われた核燃料サイクルに反対する女性たちのキャンプで、阿木幸男「非暴力トレーニング——社会を自分をひらくために」（野草社、一九八四年）などをテキストに「非暴力トレーニング」の考え方を共有していたこと（一七三—一七四頁）などを明らかにしている。
- 3 「創刊にあたって——いま、魂を起す旅へ」『80年代』一号、一九八〇年一月、六頁。
- 4 津村喬「今、共生のルールを——野草型組織論展開のために」『80

年代』一九号、一九八三年一月、五二頁。

5 「野草図鑑『80年代』二二号、一九八三年五月、七頁（沢野芳高千葉市 三二歳「エネルギーを蓄積してくれる」）

6 「野草図鑑『80年代』二〇号、一九八三年三月、七頁（守谷明宏小樽市 二六歳「書き手の生き方が見えない」）

7 「野草図鑑『80年代』一九号、一九八三年一月、八頁（夕狩彰一東京都 二〇歳）

8 谷淵隆朗「原発や農業なんていらぬ！」『80年代』三六号、一九八六年七月、四二頁。

9 森岡正博『生命観を問いなおす——エコロジーから脳死まで』筑摩書房、一九九四年一〇月、一二四頁・一九三頁。

10 アイリーン・スミス単独の名前での連載は「スリーマイル島物語」と題され、『80年代』の三九号よりはじまるが、「私と中尾ハジメは、

（中略）地方新聞の記事から見つけた」（スリーマイル島物語）『80年代』三九号、五二頁）、「少なくとも私たち（中尾ハジメと私）はこの話に今まであまり出会っていない」（スリーマイル島物語）『80年代』四六号、一〇一頁）という記述や、インタビュウの書き起こしに、中尾が話している内容が彼の名前とともに記されているなど（スリーマイル島物語）『80年代』三九号、四〇号、四二号）中尾の仕事と連続して、スミスの仕事もあることがうかがわれる。

11 注1に同じ、二五五頁。

12 津村喬（つむらたかし）一九四八年生まれ、二〇二〇年没。早稲田大学中退。大学在学中に毛沢東主義に傾倒する。中退後から反原発運動、反差別運動の市民運動に関わる。一九七六年一月に、別冊宝島3として「東洋体育」カタログ『BODYの本』を刊行。気功

などを「東洋体育」の名で対抗文化として認知させる。一九八一年に

神戸に移住。神戸太極拳同好会創設に参加。一九九五年に阪神淡路大震災で被災。『80年代』では、『こはんの贈物——からだにやさしい

東西ライス料理400』（JICC出版局、一九八五年九月）、『気功』心の森を育てる』（新泉社、一九八九年四月）に連なる記事を中心に寄稿。

13 新島淳良（にいじまあつよし）一九二八年生まれ、二〇〇二年没。

中国文化研究者、元早稲田大学教授。コミュニケーション活動に理想を見出し、ヤマギシ会に入会するが、一九七八年に脱会。当時の妻との往復書簡を『さらばコミュニケーション——ある愛の記録』（現代書林、一九八〇年一月）として刊行するが、間もなくヤマギシ会に復会し、同会の村で亡くなる。

14 野本三吉（のもとさんきち）一九四一年生まれ。教育学者。横浜市立大学名誉教授、前沖縄大学学長。『不可視のコミュニケーション 自己教育の足跡』（社会評論社、一九八五年一月）などの著作がある。

15 山尾三省（やまおさんせい）一九三八年生まれ、二〇〇一年没。詩人。六〇年代後半にコミュニケーション「部族」を結成し、七〇年代後半に屋久島の廃村に家族で移住。『80年代』では、屋久島での生活を綴ったエッセイや詩を中心に寄稿。野草社からの出版物に『狭い道——子供達に与える詩』（一九八二年六月）、『野の道——宮沢賢治随想』（一九八三年一月）、『島の日々』（一九九一年七月）、『リーグ・ヴェーダの智慧——アニミズムの深化のために』（二〇〇一年七月）、『祈り——山尾三省詩集』（二〇〇二年八月）など。

16 正木高志（まさきたかし）一九四五年生まれ。六〇年代半ばからインドを遍歴。八〇年に帰農。農業の傍ら執筆・講演をおこなう。森

林ボランティア「森の声」代表。憲法九条をまもる巡礼「ウォーク・ナイン」主宰。二〇一四年から「ふくしま文庫プロジェクト」をスタート。著作に『スプリング・フィールド——新しい時代意識の目覚め』（地湧社、一九九〇年五月）、『地球のマユの子供たち』（南方新社、二〇一九年一月）など。

17 阿木幸男（あきゆきお）一九四七年生まれ。「非暴力平和隊」国際理事や「日本チェルノブイリ連帯基金」理事などを務める。「非暴力トレーニング」ファシリテーターを務め、「参加型ワークシヨップ」手法の紹介に努める。『80年代』では「非暴力トレーニング」についての連載を行ったのち、野草社から『非暴力トレーニング——社会を自分をひらくために』（一九八四年七月）を刊行。

18 ナナオサカキ 一九二三年鹿児島生まれ、二〇〇八年没。放浪者として日本、世界を放浪した後、山尾三省らと六〇年代後半に「コミュニケーション「部族」をはじめ。アレン・ギンズバーク、ゲリー・スナイダーなどのビートニクの代表的な詩人ともつながりがあり、自然保護活動にも関わったヒッピー詩人。『80年代』には詩や評論を寄稿。

19 矢追日聖（やおいにっしよ）一九一一年奈良県に生まれる。一九九六年没。大倭教教主。父親の代に生家が倭神宮として宗教活動を始め、戦後それを継いで活動。奈良県に「紫陽花邑」を築き、救護施設、老人ホームなどを内包する「ムフ」を形成。後に、ハンセン病回復者復帰センター交流の家や、大倭病院などを設立。野草社から『やわらぎの黙示』『ながそねの息吹』などの著書を出版。

20 宮田雪（みやたきよし）一九四五年生まれ、二〇一一年没。脚本家、漫画原作者。一九七八年からアメリカ・インディアンのホピ族の文化に傾倒し、一九八六年に記録映画『ホピの予言』を製作し、『80

年代』にもホピ族に関する記事を寄稿。反原発運動にも関わる。

21 川口由一（かわぐちよしかず）一九三九年生まれ、奈良県桜井市在住。化学肥料、農薬、機械を用いる農業になじまず、生命を損ね、環境を汚染し、資源を浪費する農業の誤りに気付き、三八歳の時に、「耕さず、草や虫を敵とせず、農薬、肥料を用いない」自然農を始める。『80年代』では自然農の実践報告を寄稿し、読者が実際に川口の農場を見学することも多々あった。野草社からの出版物に『妙なる畑に立ちて』（一九九〇年五月）。

22 「心の支えにしている『80年代』が余りにも神様の方へ行ってしまう、すっかり私の精神も不安定になっていきましたが、46号で、また安心してました」といった読者投稿もみられる。（『野草図鑑』『80年代』四七号、一一一頁。三浦翠 山口県 五〇歳）

23 「はじめて読みました。いままで『世界』なんか読んで欲求不満になっていたのですが『80年代』には、ぼくの探していた（いる）なにか（『世界』にはない）があるようです。体が動き出さなくてむずむずしてきました」（『野草図鑑』『80年代』二〇号、一九八三年三月、九頁）
「体が動き出したくなる」鈴木康充 千葉県 一九歳という読者投稿からは、既存の論説雑誌に飽きたら若い世代が『80年代』を手にとった様子が垣間見える。また『80年代』13号より読んでいます。血気さかんない若い人ばかりで、自分で購読するのをびびっていました。とうとう定期購読となりました。／やっぱり40代がいなのが淋しい」（『野草図鑑』『80年代』二〇号、一九八三年三月、九頁。太田睿子 榎原市 四五歳）という投稿もあり、読者の中心は若い世代にあつたようにみえる。

24 正木高志「文明の死と再生」『80年代』一八号、一九八二年一月、

二四―二六頁。

25 島蘭進『精神世界のゆくえ―宗教・近代・靈性』秋山書店、二〇〇七年五月、三八頁。

26 井上有一「深いエコロジ運動とは何か―デイープ・エコロジ運動の誕生と展開」井上有一ほか編『デイープ・エコロジ―生き方から考える環境の思想』昭和堂、二〇〇一年三月、六頁。

27 鬼頭秀一『自然保護を問いなおす―環境倫理とネットワーク』筑摩書房、一九九六年五月、八六―八八頁。

28 トーマス・バニヤック／トム・ラブラック／宮田雪ほか「私達の悲劇をくりかえすな」『自然生活』二号、一九九一年七月。

29 「一九九一年、青森国際ウランフォーラム共同声明」『自然生活』二号、一九九一年七月。

30 緒方順子「大地に足をつけた生活」『80年代』三八号、一九八七年一月、四〇頁。

31 阿部功一「手づくりでいこうよ―旅に出てみて」『80年代』四四号、一九八八年一〇月、一三九頁。

32 槌田劭「原発のいらぬ社会と暮らし」『80年代』三八号、一九八七年一月、一五頁。

33 中尾ハジメ 一九四五年生まれ。社会心理学者、環境社会評論家。京都精華大学元学長。著書に『スリーマイル島』（野草社、一九八一年九月）、『原子力の腹の中で―福島第一原発事故のあとを、私たちはどう生きるか』（編集グループPSURE、二〇一一年一〇月）『二〇一〇年の原発問題』（編集グループPSURE、二〇一八年九月）など。

共著に、久米三四郎共著『ソ連・原発事故あなたの不安にお答えする相談室』（京都反原発めだかの学校、一九八六年六月）、加藤典洋共著『なぜ「原子力の時代」に終止符を打てないか』（編集グループPSURE、二〇一四年五月）など。訳書にユージン・スミス、アイリーン・スミス『写真集 水俣』（三一書房、一九八〇年）など。

著『なぜ「原子力の時代」に終止符を打てないか』（編集グループPSURE、二〇一四年五月）など。訳書にユージン・スミス、アイリーン・スミス『写真集 水俣』（三一書房、一九八〇年）など。

34 「スリーマイル島―原発事故現地にみる」(二号く三号)、「続・スリーマイル島」(六号)、高木仁三郎との対談「スリーマイル島事故はまだ終わっていない」(七号)、アイリーン・スミスとの共作「放射線神話のかたから」(二二号く二三号)、「くつがえされた安全神話―チェルノブイリ原発事故を読む」(三六号)、「チェルノブイリとスリーマイル島」(三七号)。

35 中尾ハジメ「くつがえされた安全神話―チェルノブイリ原発事故を読む」『80年代』三六号、一九八六年七月、一八―二二頁。

36 中尾もその点に言及しており、福島第一原発「事故」を受けて「原子力とは、いわゆる専門家ではない人々には、ほんとになんのことだか分からない世界だと思います。危険だ」という人の言うことを信じる、僕のような人々にしたところで、それはたとえば小出裕章さんの言うことを信じているから危険だと思っただけで、原発の危険性を理解しているわけではないんだ」(中尾ハジメ『原子力の腹の中で』編集グループPSURE、二〇一一年一〇月、一五―一六頁)と、複雑化し巨大化した原発を、専門家でない人が理解することの難しさに触れたうえで、結局は「危険だ」と主張する専門家の意見を「信じる」しかない現状を述べている。また、二〇〇五年に佐賀県で原発反対派と推進派の専門家が討論するのを、佐賀県民が聞くという集会の映像を見たうえで、推進派の態度が「専門家がちゃんといういろいろ研究してきたことに対して、だいたいあんたたち素人は反原発の専門家からいろいろ教えられて、それを口まねして言っているんだろうということだよね」

というものであることを指摘している（中尾ハジメ『原子力の腹の中で』編集グループP.S.U.R.E、二〇一二年一〇月、一七―二二頁）。

- 37 アイリーン・スミス 一九五〇年生まれ。写真家、通訳者、環境ジャーナリスト。元夫でアメリカの写真家ユージン・スミスと水俣で三年間生活をしながら、水俣病の被害を撮影し、そこでの写真を収めた写真集『MINAMATA』を一九七五年に出版。一九八〇年代から反原発運動を展開し、中尾ハジメとともにスリーマイル島の聞き取り調査に従事。一九九一年に環境市民団体グリーン・アクションを設立。スミスの名前のみで出された『80年代』への掲載記事は、「スリーマイル島再訪」（二三八号）、「スリーマイル島物語」（二三九号、四〇号、四二号、四四号、四六号）の六本。

- 38 中尾ハジメ アイリーン・スミス「放射線神話のななから」『80年代』二三号、一九八三年九月、九四―九五頁。

- 39 アイリーン・スミス「スリーマイル島物語」『80年代』四二号、一九八八年一月、一二三頁。
注35に同じ、一七頁。

- 40 高木仁三郎「核神話の時代を超えて」『80年代』二四号、一九八三年一月、四〇頁。

- 41 高木仁三郎「世界的視野から見た六ヶ所村核燃料サイクル基地」『自然生活』二号、一九九一年七月、二五頁。

- 42 注1に同じ、一六六頁。

- 43 注1に同じ、二四二頁。

- 44 安藤丈将『脱原発の運動史——チェルノブイリ、福島、そしてこれから』岩波書店、二〇一九年四月、九五―九六頁。

- 45 中尾ハジメ・加藤典洋『なぜ「原子力の時代」に終止符を打てない

か』編集グループP.S.U.R.E、二〇一四年五月、四三―八四頁。

- 47 中尾ハジメ『二〇二〇年の原発問題』編集グループP.S.U.R.E、二〇一八年九月、六六頁。

- 48 注47に同じ、一二五頁。

- 49 注47に同じ、一四四頁。

- 50 たとえば、日高勝之『「反原発」のメディア・言説史——3・11以後の変容』（岩波書店、二〇二二年二月）は、第三章にて、原発に関心を示した人文社会学系の知識人を整理し、福島第一原発「事故」以前には「多くの人文社会学系知識人は何も発言してこなかった」（一八一頁）とまとめているが、そこから中尾ハジメの存在が漏れているのは、明らかである。